

# 吹奏楽部実施に関するガイドラインについて

6月1日より県内各公立学校における休校措置が緩和され、分散登校、通常授業が開始されたところです。また、部活動においては「三密」を極力避けながら活動が再開しつつあります。このような中、吹奏楽部の活動に対し、楽器演奏のイメージや憶測から、科学的根拠の無いまま、活動自粛を煽るような情報が多数見受けられています。

本連盟といたしましては、今後行われる国内外のオーケストラや、YAMAHAなど楽器メーカーによる科学的実証等をもとに、楽器を愛する皆さんがしっかりした後ろ盾のもと、堂々と楽器演奏や部活動ができる方法を検討し、ご提案させていただきたいと思っております。

従いまして具体的な責任あるガイドライン等の策定は、現時点では不可能と考えています。

皆様におかれましては、大変不安の中での活動再開ではありますが、以下に参考となるホームページのURLや、Facebookを提示いたしますので、音楽を愛する子供達のために「何をすべきか」ではなく、「何が出来るか」を考えながら、共に進んで参りましょう。ご協力をお願いいたします。

ホームページ URL (ドイツ語です)

<https://www.br.de/nachrichten/bayern/bamberger-symphoniker-wissenschaftler-messen-aerosolausstoss,Ry6T6OU>

【和訳】

バンベルガー・シンフォニカー：科学者がエアロゾルの排出量を測定する

バンベルク交響楽団の科学者たちは、トロンボーン、クラリネット、ホルンからどれだけのエアロゾルが放出されているかを調べるために、気流の測定値を使用しています。浮遊粒子は、特にコロナの時代には特に危険だと考えられています。

本日(2020年5月5日)より、バンベルク交響楽団では、木管楽器や金管楽器の演奏時に発生するエアロゾルの量を調査することになりました。吹き込まれる楽器は、コロナ危機の中でも特にリスクが高いと考えられています。プレイヤーがコロナ感染症にかかった場合、彼が呼吸している空気の中で周囲にウイルスを遠くまで拡散させてしまう可能性があります。

3～12メートルの距離

このため、現在では、感染症予防のために、管楽器奏者はお互いに3～12メートルの距離を置いて演奏することが推奨されています。

"しかし、例えばクラリネットやホルンを演奏しても、楽器内の空気の流れは音が出る場所で遅くなるので、エアロゾルはほとんど放出されないと考えています"と、バンベルク交響楽団の芸術監督マーカス・アクスト氏は述べています。

霧の中を流れる目に見える空気の流れ

そのため、エアランゲンにある流体力学の会社の専門家に依頼して、演奏中に楽器から出るセンサーを使って気流を測定してもらいました。また、人工的な霧で可視化されていました。この実験を観察したのは、以前、フライブルク音楽医学研究所の2人の科学者で、管楽器の距離を3～5メートルにすることを推奨していた。

呼吸中の空気の動きがほとんど測定できない

最初の調査では、木管楽器と金管楽器の両方で呼吸する空気の動きがほとんど測定できないことがわかりました。ファゴットの鍵もトランペットの鐘も、人工的な霧の中での乱れは見られなかった。一方、計器が直接霧の中に吹き込まれたり、計器がない状態で咳き込んだりすると、強い乱気流が発生していました。フライブルク音楽医学研究所のベルンハルト・リヒター教授が最初の調査についてコメントしています。

"これは私たちの期待を裏切るものであり、今後の公共の音楽制作に自信を持たせてくれます。" フライブルク音楽医学研究所 ベルンハルト・リヒター教授

バンベルクのコンサートホールでの測定の後、研究室でさらなる調査が行われます。その結果は、ベルリンとミュンヘンのウイルス学者に提示され、芸術監督マーカス・アクストの計画に基づいて、政治的行動のための提言を行うことになる。

危険のない音楽

バンベルク交響楽団をはじめ、ドイツにある130ほどのプロのオーケストラの目標は、音楽家や聴衆の健康を脅かすことなく、できるだけ早くコンサートを再開できるようにすることです。

<https://note.com/fukudayosuke/n/nd9be5dd9812a>

Facebook (ウィーンフィル 5月16日 23:44の投稿)

Vienna Philharmonic/Wiener Philharmoniker